

城南生活小十年

日本語学者 田中 章夫（高校2期）

○都立城南中学校生活（四年間）

----赤坂区立氷川国民学校初等科を修了して、昭和十九年四月、麻布区宮村町の都立城南中学校に最初の入学生として、入学した。前年の六月までは、東京府立第二十二中学校の校名で、校舎は青山北町にあり、我々の入学試験も、そこで行われた。



城南生活は、朝礼の「校長先生ニ敬礼、カシラー、ナカ！」で始まった。そして、最初の授業は、陸軍少尉・田辺守衛教官殿による「教練」だった。敬礼の仕方、隊列の組み方、号令のかけ方、ゲートルの巻き方等々、二時間ぶっ通しで絞られた。二年生になると、今は住宅地だが、校舎の裏手に広がる草原の教練場で、匍匐前進や散開訓練、手榴弾の投擲、木銃の銃剣術などでしごかれた。草いきれと土埃、そして空腹の日々だった。

このころ、上級生は、すでに工場に動員されていたが、昭和二十年の四月から五月にかけて、我々二年生にも、空襲時の延焼防止のための強制疎開家屋の撤去作業の動員令が発令され、今の六本木から西麻布一帯の住宅地が作業場だった。「かかれ！」の命令で、我々中学生が最初に飛び込んで、畳、戸板、ガラス戸・襖・障子を運び出すのだが、2人一組で2階の畳を運び下ろすのが辛かった。面倒だからと、ベランダや物干しから投げ下ろしては叱られた。「終わりました」と報告すると、待機していた大工サンが飛び込んで柱に鋸を入れ、鳶職が屋根の瓦をはがして、棟にロープをかける。そのロープを警防団や愛国婦人会の人達といっしょに、かけ声をかけて引っ張って、一軒ずつ引き倒していく。五軒長屋がユラリと揺れて崩れ落ちるのなどは壮観だった。土地柄から、立派な邸宅も多かった。立ち退き命令から一週間か十日で出ていったので、ピアノや、応接セット・箆笥・本箱などが、そのままになっていた。立派なソファで弁当を食べてから運びだしたりした。本も食器も衣服も持ち出し自由、将棋の本を抱えて帰った思い出がある。こうした、立派な邸宅は人力では、びくともしない。そうすると、砲塔をはずした小型戦車がやってきて、あっという間に引き倒していった。この動員の楽

しみは、三時の握り飯、日によって雑炊。そのどちらにも、細切れのうどんが混じっていた。夕方、銭湯の入浴券をもらって帰ったが、後日、一日八五銭の給与が届いた。これが、生まれて初めてかせいだ「お給金」だった。

この動員の直後の五月二五日の夜、校舎に焼夷弾の雨。講堂の床が炎上したが、宿直の織田富勝先生と、宿泊警備の四年生生徒の消火活動で延焼が防止された。

八月十五日、校庭で玉音放送を拝聴。やがて、敬礼とゲートル廃止。武器庫の小銃・機関銃などが米軍に接收され、武装解除。そして平和の学園に衣替え、というわけである。

翌・昭和二一年の五月のこと、担任の織田先生の命令で、突然の座席替え。近視の生徒を最前列に残して、あとの生徒は、教室の最後列から、中間試験の成績順に前へ前へと並ぶはめになった。多分、城南の史上、空前絶後の試みだったのではなかろうか。よそのクラスの生徒が面白がって覗きにくるのには閉口したが、夏休み明けには解消したように記憶している。

○都立城南新制高等学校生活（二年間）

----都立城南中学校五年生に進級するはずだったのに、昭和二三年四月一日、この年に発足した「新制高等学校」の二年生ということになった。二年下の学年は「東京都立城南新制高等学校併設中学校」三年生、俗称「チュウサン」となり、二年間、最下級生の憂き目を見た。その上、校舎の一階には前年四月に発足した「港区立城南中学校」が間借りしていた。

「新制」とはいえ、憧れの「高校生」になったわけで、マントを引っかけて、腰に手拭いをぶら下げて、カランコロンと朴歯（高下駄）で闊歩する「旧制（高校生）気取り」も現れた。学校側も、職員会議のない週に、先生方の専門分野の課外講義を開講したり、学校行事や校友会活動、図書室・保健室の運営を、大幅に生徒委員に任せるなど、「大人扱い」というか「生徒→学生」に変わっていった。

課外講義では、太田英雄先生の「フランス語入門」や数学の「非ユークリッド幾何学の話」などがあったが、今、考えてみると、国語の中山崇先生の「国語の位相」の講義は、言葉の性差・年齢差・階層差など扱ったもので、最先端の研究の紹介だった。この講義を伺ったおかげで、後年、小著『日本語の位相と位相差(明治書院)』をまとめることができた。「あとがき」で、この課外講義にに触れ、中山先生から礼状をいただいた。

高校三年の秋、谷信勝先生の大変なご尽力で、我々の学年で、城南初の関

西旅行が実現した。米持参、往路は夜行列車、復路は名古屋港から、戦時中、病院船として活躍した白山丸の夜間航行という、前後五日の旅だった。奈良・京都、とにかく、歩きに歩いた旅だった。

昭和二五年一月に、校名から「新制」が消え、三月に卒業。四月から男女共学で、初めての女子生徒を迎えられる後輩をうらやみつつ----

○都立城南高等学校講師生活（三年四ヶ月）

----昭和二九年、東京教育大学（現・筑波大学）大学院進学と同時に、城南高校国語科非常勤講師に就任、城南OB教師・第一号である。翌年には、一年後輩の大山武彦（数学）・小林一仁（国語）の両君が、やはり非常勤で就任され、一緒に同窓会の仕事などもした。

この年の十一月、二年生の有馬徹君が、谷川岳の一ノ倉沢で遭難。当日たまたま谷川岳で合宿していた、東京教育大学山岳部のリーダーに問い合わせたら、帰京したばかりだった。そのまま、すぐ現地に行ってくれるように頼んで、翌日、城南の校長室で、村田純一校長と、山岳部顧問の飯村秀信先生・東京教育大学山岳部の徳久球雄監督・城南高校山岳部OBの中村晴伸君らと相談して、飯村先生のもとに、教育大・城南の山岳部による救助隊を組織した。現地からの報告では、尾根から約九十メートル転落、生存は望めないとのこと。土合の山小屋に本部を置いて、肩ノ小屋に進出して偵察すると、尾根には、すでに雪が積もり、遺体まで降下するのは、きわめて危険という判断になった。

その夜、渋谷駅に待機する、村田校長と父親に、土合駅の鉄道電話で連絡した（一般の市外電話は数時間待ちの時代だった）。翌年の五月、雪解けのあと、遺体発見の報を受けて、城南山岳部の現役とOBの手で収容し、一ノ倉沢出合で、検視の上、荼毘に付した。この遭難がきっかけになって、城南山岳部の面倒を見るはめになり、顧問の先生とともに、穂高の涸沢合宿や志賀高原のスキー合宿などに同行する機会を得た。

最後にもう一つ、この時期の一大イベントに、稲畑絢子先生の熱意の賜物「ベートーベン・第九交響曲（合唱付き）」の演奏会がある。山田和男・指揮のもと、当時一流の歌手と、城南高校音楽部の現役・OBの合唱で、昭和三二年十月に、日本青年会館で開催された。まさに快挙である。「城南」創立十五周年記念行事だったが、この音楽会の入場券の売りさばきのために、小林一仁君と一緒に呼びかけた同窓会幹事会での、稲畑先生の、まさに声涙ともに下る大演説は、忘れられない思い出である。